

碩心会の歩み (昭和三十四年、五年)

三井要岳

三十四年二月、私は守川天山、高橋碩風氏にすめられて入会、教場は約一坪の土間で薄板の取付ベ
ンチあり、オーバーに襟巻姿で練習は根岸先生(当時翠山)の指導ではじめられ、松井先生も月に二、三度指導に見えたと。午後七時から九時頃まで大声で唸ったので寒さもさして感じなかった。同年九月、井沢さん村田さん(二、三年後やめられて昨年死亡)が入会、やっとなりやりにこぼす様になつた三十四年秋に坂倉さん高橋さん、三十五年秋に故根岸清岳さん下条さんと三井が初任に推せん昇任した。その頃、現県本部副本部長、石渡岳道先生が教場に見え、本宮三春先生作の「戦場の月」を一吟されその名調子に一同感激したので覚えておる。

同年十一月第六回県本部の大会には八名参加した。(出吟番数三百十番で当時の県本部会員数は一口入ロ名であつた)井沢、村田、下条、鈴木、守川氏等は独吟で、坂倉、高橋、三井で藤田東湖の長詩「述懐」を連吟し、最高音ニヶ所あり、練習に苦勞した託懐が未だにある。その冬は薪を持ちより暖をとつ

た。
(註)若干の丸録を基に私の記憶が主で勢い、私心の記述になると思いますが御了承下さい。尚、追加訂正される記事がありましたら申出下さい。最後には一冊にまとめたと思いますから。

吟じ出しの呼吸と発声法について

会長 三井要岳

自分の持つてゐる音階中のまん中の基準音で吟に入るのが普通ですが、それがむづかしいことは今更申すまでもありません。何年経験してもむづかしいもので、勿論その時の精神状態、健康状態或いは詩文の内容等によつても変わり、又変えることも当然ですが次の方法によつて繰返えし練習することにより一応大きい失敗はなくなると思ひます。

- 一、刀やいばまないで吟題作者名を言い静かに充分息を吐い込む。胸有に吸いこまないで腹式呼吸の要領で横隔膜を下り、下腹部に軽く力が入るようにする。
- 二、吸い終つたら一旦止める。そしてすぐ吟に入らぬいで鼻から静かに一秒か二秒息を捨てる。
- 三、その捨てる息に乗るよりに発声吟に入る。体吟から言つて失敗した時はこの捨て息をしない。

